

『鹿大史学』第57号別冊

2010年2月1日発行

鹿大史学会 鹿児島

論説

薩摩塔研究

—中国産石材による中国系石造物という視点から

高津 孝・橋口 亘・大木公彦

薩摩塔研究—中国産石材による中国系石造物という視点から

高津 孝・橋口 亘・大木公彦

本論は、九州の鹿児島県、長崎県、佐賀県、福岡県に広く分布する薩摩塔について、中国産石材の視点から検討を加えるものである。薩摩塔は、昭和30年代に齋藤彦松氏によって、発見、命名され、当初は鹿児島県内の4基のみが知られていた¹。その後、鹿児島県のほか、長崎県、佐賀県、福岡県でも発見されている²。薩摩塔自体には、由来を示すものは何も無く、また、文献による記述も江戸後期に下るものである³。したがって、薩摩塔については、その製作地、製作年代、造立意図など、不明の点が極めて多い。一方、初期研究段階の昭和30年代以来、その特殊な造形と石質から、中国産石塔である可能性がこれまで度々指摘されてきた⁴。平成20年の高津・橋口論文は、浙江省産石材と比較した、肉眼及びルーペによる観察（以下、肉眼観察という）から、坊津薩摩塔が浙江省産石材「梅園石」によって作成された可能性を指摘した⁵。今回、岩石学的分析を行い、坊津薩摩塔の石材と中国浙江省寧波産石材「梅園石」が同一石材であるとの証明をおこなった。また、鹿児島県下の薩摩塔については、坊津薩摩塔と同一石材であるとの確認は既に行っていたが、改めて、平成21年7月に、北部九州地区薩摩塔石材の調査を行い、長崎県平戸市、福岡県久山町所在の薩摩塔が、坊津薩摩塔と同一石材と認定可能であると確認した。

1. 薩摩塔石材および梅園石の岩石学的特徴

平成21年4月、次の2つの試料について、岩石学的分析を行った。試料(1)は、高津が、学際的調査「中国寧波市銭塘湖周辺史氏墓調査」⁶の過程で、墓道に設置された石像の石材産地として寧波市鄞州区梅園郷梅錫村華興塘⁷の採石場を訪問、採石場管理者の許可を得て採集(2005年11月4日(金))した石材で、石材の名称は「梅園石(Meiyuanshi)」である。試料(2)は、平成21年2月27日に坊津歴史資料センター輝津館所蔵の薩摩塔から、南さつま市教育委員会の許可を得て、同教委の橋口が採取した石材である。この両者について、それぞれ薄片作成のうえ、偏光顕微鏡観察を行い、鉱物組成やその特徴について比較し、極めて類似した凝灰岩であることを確認した。さらに、X線顕微鏡による元素とその分布、高速X線回折装置による元素と鉱物の特定を行った⁸。その結果、元素の分布パターンが極めて相似していること、元素の含有パターンが酷似していることから、坊津薩摩塔の石材は、中国寧波産石材「梅園石」であると認定可能であることがわかった。これらの石材は、火山活動によって噴出した白亜紀の、やや赤みを帯びた均質な凝灰岩で、ユータキシティック構造(溶結する時に軽石等が熱と圧密で引き延ばされた火山ガラス)は認められないが、火砕流堆積物である可能性が高い。

薩摩塔の分布する九州には火砕流堆積物が多く存在するが、薩摩塔に使われている石材に類似した特徴を持つものは見当たらない。その理由として、石材として採石されている、あるいはされていた火砕流堆積物のほとんどが300万年前以降の溶結した火砕流堆積物で、溶結していない凝灰岩は固結度が低く石材として適さないことが挙げられる。ちなみに石材として使われている溶結凝灰岩のほとんどが、九州に存在する阿蘇、加久藤、始良、阿多のカルデラに由来する。

西南日本内帯に分布する、凝灰岩を挟む非海成層の白亜系は九州北部、中国西部に広がる関門層群および兵庫県篠山層群がある。しかし、おもに湖成層からなる両層群から薩摩塔に類似した、石材となるような凝灰岩は知られていない。関門層群の赤みを帯びた凝灰質泥岩は「赤間石」という名称で、硯石や各種石材として使用されてきているが、粒径が非常に細かい湖成堆積物で、坊津薩摩塔の石材とは異なっている。下関の吉見海岸に露出する関門層群の典型的な赤色を呈する泥岩を調査したが、紅海老茶に近い濃さの色で、湖底に堆積したスランプ堆積物（おもに基質に支持された礫岩）と互層をなす葉理や級化の認められる泥岩で、まったく異なる岩石であった。

石材として使用された凝灰岩に、篤姫が江戸へ持参したと伝えられる硯石があり、鹿児島県上甕島の古第三系上甕島層群から採石したと考えられている。しかし、この地層は浅海堆積物で、挟在するやや赤色あるいは緑色を帯びた凝灰質泥岩を採石し、硯石として使ったと考えられ、坊津薩摩塔石材のような陸成火砕流堆積物ではない。また、東北地方から島根付近に至る日本海側には石材に使われた緑色凝灰岩層（グリーンタフ）が分布している。しかし、この層も古第三紀から新第三紀にかけて当時の海域に堆積した地層に挟在する凝灰岩で、軽石を多く含み、変質して緑色を呈することから坊津薩摩塔の石材とはまったく異なる。薩摩半島南部に分布する南薩層群も緑色凝灰岩に対比されたこともあるが、この地層は二次的な熱水作用によって変質した湖成層で、一部に凝灰質堆積物を挟在しているが、坊津薩摩塔石材とは異なる。

日本各地で知られている石材に使用された凝灰岩には、坊津薩摩塔石材と類似するものは報告されておらず、坊津薩摩塔石材は中国寧波産石材「梅園石」と考えることが妥当である。

2. 寧波産石材

現在、中国浙江省寧波市には、その郊外の東銭湖周辺に、南宋の史氏一族を中心に多くの墳墓が残されている。これら史氏の墳墓は、墓道の両側に文官、武官、馬、虎、羊の石像が並び、石の椅子や石筍、牌坊を有するものもある⁹。これら石造物の石材に主として使用されたのが、寧波の鄞西地区の梅園石、光溪石である。唐の太和七年(833)に著名な水利施設である它山堰が築かれるが、光溪石(小溪石)が使用されており、鄞西地区石材使用の歴史は長い。『鄞県志』¹⁰には、鄞県の石材について以下のように説明されている。

建築石材——鄞県の建築石材の開発史は長い歴史を有する。鄞江橋に産出する小溪石と梅園郷に産出する梅園石はかなり有名である。この二つの石材は、ともに方岩組地層(Kif)に産する。小溪石は、紫紅色から浅紫色の泥質粉砂岩、砂岩、砂礫岩中から採掘される。岩石の層理は、薄く且つ均質で、水平に近く、節理は少なく、直接層理に従ってはぎ取り板材とし、あるいは加工して長方形石材、方形石材とし、住宅建築、道路舗装、橋梁建築、水利施設建築、碑牌彫刻等に用い、寧波などの地域で消費された。小溪石の採石場には、光溪村上化山、懸慈村宕山の二箇所がある。梅園石は梅園山採石場に産出し、岩石は褐灰色凝灰岩である。単層で厚みがかなりあり、層理に従って剥離し板材とすることは困難であるが、任意の固まりとして加工することが可能である。さらに、石質は均質で精緻であり、石碑、装飾彫刻に最適である（『鄞県志』第二編第一章第三節鉱蔵）¹¹。

また、方岩組地層(Kif)については、以下のように記す。

方岩組地層(Kif)——鄞西平原の端の鳳巒から鄞江橋一帯および平原の孤丘上に露出し、その他は、多く平原区の第四系地層に覆われている。この地層の岩石性の下部は灰紫色砂礫岩、礫岩であり、紫紅色粉砂岩を含んでいる。中部は、灰紫色中細粒砂岩、粉細砂岩、泥質粉砂岩であり、砂礫岩および少量の薄層状凝灰岩、沈凝灰岩、泥灰岩透鏡体を含む。上部（地上には露出せず）は、紫色に黒色を含む泥質粉砂岩を主としており、凝灰質砂礫岩を含む。厚さは1734メートル。（『鄞県志』第二編第一章第一節地質）

また、『寧波市史』第三卷第一章第二節地層の白亜紀の説明では、次のように述べる¹²。

白亜紀——寧波盆地・寧海盆地、四明山高地余姚芦田・丁家畈一帯に分布し、主として河湖相の沈積であり、火山岩の挟層が多く、面積は459平方km、上から下に6つの層が露出している。……方岩組層は、寧波盆地西南端の鄞県鳳巒・鄞江橋から奉化外村一帯に露出し、面積は125平方km。主として紫紅色の沈積碎屑岩で、少量の酸性凝灰岩を含む。厚さは1734メートル。

すなわち、梅園石は、主として河湖といった淡水中に沈積して形成された地層を中心とする白亜紀の地層6層中の下から3番目の地層である方岩組地層に属する褐灰色凝灰岩である。

石材を扱うのは難しい。それは、岩石は一定の地層に含まれ、かなり広く分布し、思いも掛けない程離れた地域の石材が一致することも珍しくないからである。ただし、建築素材、石碑などに利用される石材の場合、大抵は特定の採石場から採掘され、同一の石材が一定の地域に一定量様々に加工されて存在するのが普通である。したがって、ある特定の岩石を含む地層が存在することと、岩石の石材としての利用は次元が異なる問題となる。

現在、中国で「梅園石」と称される中国浙江産石材は、白亜紀の方岩組地層に含まれる紫灰色凝灰岩である。白亜紀の方岩組地層は、『中華人民共和国地質図集』¹³によれば、浙江省では、寧波が北限で、近傍では天台の周辺、その他ほとんどが内陸の方岩地区、金華、蘭溪、衢県周

辺に露出している。江蘇省では、南京の北岸から、句容、溧水、宜兴にかけて点在して露出している。福建省では、内陸山間部に点在して露出しているが、海岸線部には全く存在しない。山東省では、その東南部に広く露出する。これらの地層が、梅園石と同一の石材を含むか否かについては明白ではない。また、石材として使用されたかについても明白ではない。日本中世の中国との交易ルートを考慮すると¹⁴、宋代に関しては、中継地として明州（寧波）が圧倒的な地位を有した点、元代に入っても、明州は日本への窓口として機能した点、航路の多様化した時点でも、杭州、温州、台州、福州などの港湾都市近傍では、台州を除き、梅園石と同一石材の入手可能性を有する地層がないこと、さらには、南宋期に史氏一族の墓道石像として石造物に広く使用されていた事実、科学的分析により元素構成のレベルでの一致が見られることから、坊津薩摩塔は明州（寧波）産石材が使用されたと判断される。

3. 北部九州地区調査

科学分析等を考慮すると、坊津薩摩塔の石材が、中国浙江省寧波産石材であると判断できるが、その他の薩摩塔の石材はどうであろうか。著者達は、鹿児島県下の薩摩塔5基については既に実地調査により肉眼観察から、同一石材と認定可能であることを確認した。次に、北部九州地区の薩摩塔の石材について同定作業を行う必要性が出てきたため、本年7月、著者等は北部九州地区の薩摩塔石材調査を行った。

調査対象は、以下の6地点である。

1. 館山是興寺跡の薩摩塔（長崎県平戸市）¹⁵
2. 桜溪書院跡の薩摩塔（長崎県平戸市）¹⁶
3. 安満岳の薩摩塔（長崎県平戸市）¹⁷
4. 宮ノ浦沖の島の志々伎神社沖の宮塔（長崎県平戸市）¹⁸
5. 田平町海寺跡の薩摩塔（2基）・宋風獅子（2基）（長崎県平戸市田平町里田原歴史民俗資料館）¹⁹
6. 首羅山遺跡の薩摩塔（2基）・宋風獅子（2基）²⁰

いずれも、大木によって坊津薩摩塔と同一石材と認定可能と確認された。

薩摩塔調査と平行して、福岡県宗像市の宗像大社辺津宮の神宝館を訪問し、宗像大社文化財管理事務局堤宏事務局長、重住真貴子学芸員、河窪奈津子学芸員のご好意により、国指定重要文化財「経石 正面阿弥陀如来像 背面阿弥陀経」の調査を行うことができた。全体は、経石、礎石、蓋石の三部に分かれ、礎石、蓋石については坊津薩摩塔石材と同一と判断できたが、経石本体が、江戸時代以来、度重なる拓本採取のために墨が全体に付着しており、石材部分の確認が行えなかった。しかしながら、礎石、蓋石については坊津薩摩塔と同一石材と確認した。「経石 正面阿弥陀如来像 背面阿弥陀経」は、剥落甚だしきも、「大宋□□□年」と判読できる刻文があり、中国宋代（960-1279）の成立であることは確かで、かつ、確認可能な最古の年

号として添刻文中に「承久二年(1220)」という年号が刻まれており、宋より日本にもたらされた経石であることは確実である。したがって、1220年以前に、中国南宋で作成され、日本にもたらされた貴重な文化財といえる²¹。この経石が寧波産石材である可能性を有することに気づいたのは、静永健2009による。

4. 薩摩塔の造形

薩摩塔の素材に中国浙江省産石材が用いられていることが明らかになってきた中で、中国産石材を使用した石造物としての薩摩塔の造形について検討を行ってみたい。薩摩塔の基本構造については、宝塔と宝篋印塔の混在（黒田1974）、五輪塔と宝篋印塔の混在（大石1998）など様々な見方があり、一方、松田朝由は「須弥壇に壺形の塔身が組み合わさった石造物」（松田2008）とした。また、井形進は「下部に脚付の重厚な台、上部に高欄を造り出した、四角や六角の軸部の上に、水瓶や壺のような形をした塔身を据え、さらに上には、強く反った屋根を載せる形状で、軸部には四天王が、塔身には仏が浮き彫りで表されて」いるとし（井形2008a）、「須弥壇の上に龕を設けて仏を安置し、その上に屋根がかかるという構成」と捉え、須弥壇は「禅宗様の木造須弥壇」、屋根は「木造建築」のそれを模した可能性を指摘した（井形2008b）。また、高津孝・橋口亘は、薩摩塔が包括されるような基本構造を持つ、「屋根（笠）」・「仏龕状の塔身部」・「須弥壇（須弥座）状の中台・軸・基礎部」等を組み合わせた石塔（中国浙江省麗水市の靈鷲寺石塔など）の一群が中国に存在することを指摘し、この一群中において、薩摩塔のルーツに位置付けられるような、「壺形の龕部（塔身）の中に仏像を浮彫し、須弥壇の上部（中台部分）に高欄意匠を施し、その下に四天王を浮彫するタイプの石塔」が小グループとして存在する可能性を指摘した（高津・橋口2008）。

ここでは、高津・橋口が示した概念をもとに、「屋根（笠）・仏龕・須弥壇（須弥座）の組み合わせを基本構造とし、壺形の龕部の中に本尊となる仏像を浮彫りし、須弥壇の上部に高欄意匠を施し、その下に四天王を浮彫りするタイプの石塔」のグループを「薩摩塔」（狭義の薩摩塔）とする。また、これに仏龕の中を刳り抜き本尊を別造りとする「志々伎神社沖の宮塔」（「類薩摩塔」）を含めた「屋根（笠）・仏龕・須弥壇（須弥座）の組み合わせを基本構造とし、龕部が壺形で、須弥壇の上部に高欄意匠を施し、その下に四天王を浮彫りするタイプの石塔」のグループを「薩摩塔類」（広義の薩摩塔）とする。さらに、これに中国の類似石塔を包括した「屋根（笠）・仏龕・須弥壇（須弥座）の組み合わせを基本構造とするタイプの石塔」のグループを「靈鷲寺型石塔」とし、分類の基本概念としたい。

「薩摩塔類」（広義の薩摩塔）には、六角を基調とするタイプ（六角基調型）と、四角を基調とするタイプ（四角基調型）が確認されており、「類薩摩塔」には六角基調型のみ、「薩摩塔」（狭義の薩摩塔）には六角基調型と四角基調型の両方が確認されている。六角基調型は法量の大き

い個体、四角基調型は法量の小さい個体に多い傾向がみられる。また、「薩摩塔類」（広義の薩摩塔）には、頂部を除く、屋根（笠）・仏龕・須弥壇（須弥座）を複数個の石で造るタイプ（寄石造り型）と、同部分を一石で造るタイプ（一石造り型）が確認されており、「類薩摩塔」には寄石造り型のみ、「薩摩塔」（狭義の薩摩塔）には寄石造り型と一石造り型の両方が確認されている。寄石造り型は法量の大きい個体、一石造り型は法量の小さい個体に多い傾向がみられる。

「薩摩塔類」（広義の薩摩塔）には、仏龕の中を割り抜き本尊を別造りとするタイプ（本尊別造り型）と、仏龕に本尊の仏像を浮彫りするタイプ（本尊浮彫り型）があり、前述の分類概念では、本尊別造り型を「類薩摩塔」、本尊浮彫り型を「薩摩塔」（狭義の薩摩塔）とし、「薩摩塔類」（広義の薩摩塔）のカテゴリに包括した。これまで確認されている本尊別造り型の「類薩摩塔」は、「志々伎神社沖の宮塔」1基のみであるが、「志々伎神社沖の宮塔」は、「薩摩塔類」の中でも最大の法量を誇ることから、本尊別造り型は法量の大きい個体に多いタイプである可能性がある。

「志々伎神社沖の宮塔」は、本尊別造り型であるという点や蓮弁意匠を持つ点などが中国浙江省麗水市の霊鷲寺石塔（南宋）等と共通し、中国で確認されている「霊鷲寺型石塔」と日本で確認されている「薩摩塔類」を結ぶ重要な資料である。「四角基調」・「一石造り」・「本尊浮彫り」の要素が、「薩摩塔類」の小型化に伴うものであるとするならば、「志々伎神社沖の宮塔」が、「薩摩塔類」の中で最大の法量を誇る「六角基調」・「寄石造り」・「本尊別造り」の石塔である事実から、「志々伎神社沖の宮塔」を古い要素をもつ作例として位置付けることも可能であると考ええる。

5. 問題点の整理

薩摩塔の素材に中国浙江省産石材が用いられている点が明確になったことで、改めて検討すべき点を整理する必要がある。

製作年代については、現在知られている江戸以前の文献的記述は、「志自岐沖之宮石鉢之圖／沖島全圖 平戸藩蔵」（文政五年壬午十月、松浦史料博物館所蔵）のみである。したがって、文献的記述については、江戸後期にまで下り、それ以前の文献的記述は知られていない。また、日本国内の石造物を中心とした型式論的検討による年代推定も存在するが、石材が中国産と判明したことから、前述した南宋の紀年銘資料である霊鷲寺石塔（1216-18）との類似性も踏まえ、再検討が必要となる。建久7年（1196）、東大寺再建に伴って、中国産石材が輸入され、「中門石獅々、堂内石脇士、同四天王」が製作されたこと²²、一部の部材が坊津薩摩塔と同じ浙江産石材と認定可能であると判明した宗像大社「阿弥陀経石」が、承久二年（1220）以前に南宋から日本にもたらされたものであることなども考慮すると、12、13世紀を中心として製作年代

を検討すべきように考えられる。ただし、確定的な証拠が存在しない以上、多方面からの総合的検討を必要とする。

製作場所については、石材が中国浙江産であることから、当然、中国浙江地区が第一に考えられるであろう。前述したような造形的観点からも、類似性が指摘される中国浙江省麗水市の霊鷲寺石塔など、中国の石造物と比較して検討を深める必要を感じる。また、中国産石材が輸入され、日本（九州地方）で製作された可能性についても検討の余地がある。その場合、東大寺再建時のように、寧波（明州）の石工が日本で製作した可能性や、日本人石工が製作した中国系石造物である可能性なども考えられる。今後、日本産石材による薩摩塔が発見された場合、少なくとも薩摩塔の一部は日本で製作された可能性が高まる。しかしながら、現段階では、薩摩塔が中国浙江省産石材という素材的共通性を持ちつつ、海を挟んで中国と対面する九州西部を中心に分布している点を重視すると、中国で製作された薩摩塔が船舶によって九州にもたらされた可能性が一番高いであろう。

造立主体は、日本に滞在した中国商人、造立地付近を掌握していた日本在地権力であった可能性が考えられるが、推定に止まる。今後、製作年代、宗教的背景とも関連して、分布、伝来の検討が必要であろう。

造立意図については、前述した南宋の霊鷲寺石塔が先祖に対する供養塔であった²³という点から、薩摩塔も供養塔であった可能性が考えられる。ただし、日本に将来された後、時代の経過の中でその性格が変化した可能性は否定しない。

6. まとめ

今回の北部九州地区薩摩塔調査によって、鹿児島県、長崎県、佐賀県、福岡県に散在して存在する薩摩塔には、石材の同一性が認められる可能性が出てきたといえる。全ての薩摩塔を確認することは出来なかったが、予想としては、そのほとんどが中国寧波産石材であり、中国で製作されたものが日本へもたらされた可能性が高いと考えられる。製作年代、日本へもたらされた年代については確実な証拠が存在せず不明である。九州西部に集中して薩摩塔が存在することをどのように考えるか、今後検討すべき問題点は多い。本論が将来の研究に向けての礎となることを願っている。

中国浙江省寧波産石材との科学的分析の対象となったのは、坊津薩摩塔1例のみであり、今後、坊津薩摩塔を基準遺物として、石材の観点からの同定作業は進められるべきである。

石造物研究は、詳細な記述を中心とする造形面からの研究を中心とし、これに文献史学からの成果を加味して、これまで大きな成果を挙げてきた。一方、石造物の素材そのものについて研究を行う素材論からの探求は、造形面からの研究の膨大な研究成果に比して少なく、今後の検討課題となっていると言えよう。日引石についての素材論からの検討が進むことにより、日

本海沿岸部の海を通じた交易の諸相が明らかになったように²⁴、素材論的探求は、過去の日本社会における流通機構という側面に新たな資料を提供する可能性を含んでいる。本論文では薩摩塔をテーマとして石造物の素材である石材について探求を行ったが、幾つかの問題点も明らかになった。第一に、岩石学的調査には、破壊分析の必要性が有ることである。石材の分析には、試料を採取し、薄片を作成し、偏光顕微鏡による観察を行うことが基本である。しかしながら、石造物は文化財であり、原則的に破壊分析の対象とはならない。第二に、破壊分析を行わず、肉眼観察によって石材を判断する場合にも、風化していない新鮮な断面による観察が必要となる。ところが、多くの石造物は表面が風化していたり、苔やその他の付着物などに覆われていたり、新鮮な断面をえることが多くの場合極めて困難である。そのため、石材の判定には、経験豊富な岩石学者の協力が必須であるが、確定的な結論に達しない場合もある。以上のように、実際の石材調査に当たっての問題点は多く存在しているが、素材論からの石造物研究の成果は今後大いに期待される。

-
- 1 高津孝・橋口亘2008。
 - 2 包括的に整理したものに、黒田清光1974、多田隈豊秋1978、大石一久1998、大石一久1999年、井形進2008a、松田朝由2008、井形進2008bがある。
 - 3 「志自岐沖之宮石鉢之圖 / 沖島全圖 平戸藩蔵」(文政五年(1822) 壬午十月、松浦史料博物館所蔵)。
 - 4 注1、注2参照。
 - 5 高津孝・橋口亘2008参照。
 - 6 平成17-21年度(2005-2009)科学研究費補助金(特定領域研究)「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成」に関する現地調査である。
 - 7 「梅園郷」は郷鎮名、「梅錫村」は行政村名、「華興塘」は自然村名である。
 - 8 大木公彦・古澤明・高津孝・橋口亘2009参照。
 - 9 麻承照・謝国旗2003、楊古城・龔国榮2006、美露2006参照。
 - 10 浙江省鄞県地方志編委會1996。
 - 11 また、中華民国24年(1935)『鄞県通志』(張傳保修、陳訓正・馬瀛纂、『中國地方志集成 浙江府縣志輯』(上海書店, 1993.6) 所収) 博物志・地質之部参照。
 - 12 寧波市地方志編纂委員會1995。
 - 13 中国地質科学研究院1973。
 - 14 榎本渉2007を参考とした。
 - 15 財団法人松浦史料博物館(長崎県平戸市鏡川町12) 研究管理主任久家孝史氏の協力を得た。久家孝史氏より、この薩摩塔が「肥州公御墓之圖」(松浦史料博物館所蔵)に描かれていることを教示いただく。
 - 16 久家孝史氏により最近発見された薩摩塔である。「日引石」(ひびきいし)と呼ばれる安山岩質凝灰岩の石塔残欠の上に小型の薩摩塔が載せられている。
 - 17 安満岳頂上の白山比賣神社(白山権現)裏に薩摩塔がある。上下は別で二基の薩摩塔と判断する。
 - 18 志々伎神社沖の宮塔は、壺形塔身部がくりぬきになっており、おそらく別造りの本尊が納められていたと推定される。現在、壺形塔身は破損し、本尊も確認できない。久家孝史氏より、この沖の宮

- 塔が平戸藩蔵「志自岐沖之宮石鉢之圖／沖島全圖」（文政五年壬午十月、松浦史料博物館所蔵）に描かれていることを教示いただく。
- 19 里田原歴史民俗資料館では、松永貴美子氏のご協力を得た。田平町瑞石山無量寿院海寺跡から移管された未整理の薩摩塔2基、宋風獅子2基について調査を行った。
 - 20 首羅山遺跡については、平成20年12月、久山町レスポアール久山で、シンポジウム「甦るまぼろしの山岳寺院 首羅山（白山）遺跡」が開催され、詳細な調査報告集『首羅山遺跡—福岡平野周辺の山岳寺院—』（久山町教育委員会、2008年）が刊行されている。井形進2008bでは、薩摩塔および宋風獅子についての詳細な検討がなされている。首羅山遺跡においては、薩摩塔2基、宋風獅子2基について調査を行った。
 - 21 宗像神社復興期成会1966の第十七章文化財「阿弥陀經石」。詳細については、伊東尾四郎1972「阿弥陀經石文献」参照。
 - 22 「東大寺造立供養記」（『群書類従』第24輯釈家部、1960年4月訂正第三版）参照。日本の東大寺石獅子が、寧波産石材の梅園石であるという推定は、高津が2005年11月に寧波で南宋の史氏一族墓調査に参加した時点で、寧波において広く認識されていた。むしろ、日本での認知度は低かったといえる。後に、中国の新聞記事（『東南商報』サイト2008年11月23日記事）から知ることになったが、東大寺石獅子の石材が寧波産梅園石であることを最初に提起したのは、日本の村上博優老師（長野県上田市龍洞院東堂）である（村上博優1998a, b）。師は、曹洞宗の僧侶で、訪中は100回を越え、道元禪師の足跡をつぶさに辿られた方である。師は、1979年に道元禪師得法顕彰碑建立に関し寧波を訪問され、これが端緒となり、早くも1980年代には、東大寺石獅子が梅園石で作られた可能性があるとの説を唱えられていた。2004年、村上老師は、奈良般若寺の笠塔婆に書かれた般若寺十三重石宝塔建立の経過と他の文献資料を組み合わせ、また、他の諸寺院の石造物と石材が異なることから、東大寺石獅子の石材が寧波産梅園石であるとの確信を深め、同年2月26日、寧波の鄞江鎮梅錫村の梅園石採石場を訪問調査（鄞州檔案サイト「2004年第一季度大事記」、村上博優2004）し、寧波市の文物保護の専門家とこの発見について交流したとのことである。おそらく、これが寧波ですぐに報道され、中国で広く知られることになったものと思われる。ただし、この時点での中国側専門家の見解も、「宋代に日本へ向かった商船は常に梅園石をバラストとして日本へ運び、波浪に対する船体の安定性を増強したばかりか、石材を日本に運び石彫の材料として売り払った。したがって、梅園石によって東大寺獅子像が作成された可能性は充分にある」と可能性の指摘に止まっている。さらに、2008年8月9日に奈良市で開催された中日石造物研究会主催「東大寺石獅子をめぐる研究集会」（当日配布冊子による）においても、服部仁2008（元通商産業省地質調査所地質部長、岩石学）は、梅園石の科学分析および東大寺獅子像の肉眼観察に基づき、両者は類似した色調の凝灰岩ではあるが、粒径の差異が存在し、後者には火山礫が含まれることを指摘し、現時点で入手できた梅園石と東大寺石獅子石材の同一性を否定している。さらに、落合清茂2008（大阪府教育センター）も、梅園石と東大寺石獅子石材の類似性の指摘にとどめ、吉田久昭2008（大阪府北野高校）も、梅園石が東大寺石獅子石材である可能性を指摘するのみである。現在では、東大寺石獅子梅園石説は、極めて慎重な検討を要する段階に入っているが、早くも1980年代に遡る村上博優老師による可能性の指摘は、日本の石造物研究に寧波産石材という観点を提示したという点で大きな意義を有すると考えられる。
 - 23 「靈鷲山石塔欵識」（清・李遇孫撰『括蒼金石志』巻7、『石刻史料新編』（新文豊出版公司、1977年）第一輯地方類所収）。
 - 24 大石2001参照。

引用・参考文献一覧

- 井形進2008a 「白山遺跡の薩摩塔」(『九歴だより』No.27、九州歴史資料館、2008年4月)
- 井形進2008b 「首羅山遺跡の宋風獅子と薩摩塔」(久山町白山遺跡調査指導委員会・久山町教育委員会編『首羅山遺跡－福岡平野周縁の山岳寺院－』久山町教育委員会、2008年12月)
- 伊東尾四郎1972 『宗像郡誌(下)』(名著出版、1972年、原版1931-1944年)
- 上田信1976 「礎石についての研究調査報告」(『海事史研究』27、1976年10月)
- 榎本渉2007 「明州市舶司と東シナ海海域」(榎本渉『東アジア海域と日中交流』吉川弘文館、2007年6月)
- 大石一久1998 「中世の石造美術」(『平戸市史 民俗編』、長崎県平戸市、1998年12月)
- 大石一久1999 『石が語る中世の社会 長崎県の中世・石造美術』(ろうきんブックレット9、長崎県労働金庫、1999年1月)
- 大石一久2001 「日引石塔に関する一考察－特に長崎県下の分布状況から見た大量搬入の背景について－」(『日引』第1号、石造物研究会、2001年)
- 大木公彦・古澤明・高津孝・橋口亘2009 「薩摩塔石材と中国寧波産の梅園石との岩石学的分析による対比」(鹿児島大学理学部『鹿児島大学理学部紀要』42、2009年)
- 落合清茂2008 「岩石の命名：凝灰岩について－「東大寺石獅子の石材」へのコメント」(中日石造物研究会主催「東大寺石獅子をめぐる研究集会」レジュメ集、2008年8月9日)
- 川辺町役場1961 「これも貴重な文化財－神殿虎御前の墓－」(『広報かわなべ』1月号〔第39号〕、川辺町役場、1961年1月)
- 黒田清光1974 「解説 南九州の石塔について」(『川内市史 石塔編』、鹿児島県川内市、1974年)
- 齋藤彦松1958 『造形史学手記』第十九冊(南九州市教育委員会蔵)
- 静永健2009 「阿弥陀経石の航路」(東アジア地域間交流研究会編『から船往来——日本を育てたひと・ふね・まち・こころ』(中国書店、2009年6月)
- Suzuki, K., Karakida, Y. and Kamada, Y. (2000): Provenance of granitic anchor stones recovered from the Takashima submerged site: an approach using the CHIME method for dating of zircons. Proc. Japan Acad., 76, 139-144.
- 鈴木和博等2000 鈴木和博、與語節生、加藤文典、渡辺誠「博多湾、志賀島で発見された玄武岩質礎石の産地」(『名古屋大学博物館報告』16、2000年)
- 浙江省鄞県地方志編委会1996 『鄞県志』(中華書局、1996年9月)
- 浙江省文物局2004 『意匠生輝』(浙江人民美術出版社、2004年11月)
- 高津孝・橋口亘2008 「薩摩塔小考」(『南日本文化財研究』No. 7、『南日本文化財研究』刊行会、2008年5月)
- 多田隈豊秋1975 『九州の石塔』上巻(西日本文化協会、1975年)
- 多田隈豊秋1978 『九州の石塔』下巻(西日本文化協会、1978年)
- 中国地質科学研究院1973 『中華人民共和国地質図集』(中国地質科学研究院、1973年)
- 張傳保1935 『鄞県通志』(張傳保修、陳訓正・馬瀛纂、1935年、『中國地方志集成 浙江府縣志輯』(上海書店、1993年6月)所収)
- 寧波市地方志編纂委員会1995 『寧波市史』(中華書局、1995年10月)
- 服部仁2008 「東大寺石獅子の石材について」(中日石造物研究会主催「東大寺石獅子をめぐる研究集会」レジュメ集、2008年8月9日)
- 毎日新聞社1961 「薩摩塔の名で町文化財に 川辺町の三つの特殊仏塔」(『毎日新聞』鹿児島版、1961年11月20日朝刊)
- 麻承照・謝国旗2003 『東銭湖石刻』(中国文聯出版社、2003年9月)
- 松田朝由2008 「鹿児島県の薩摩塔」(『南日本文化財研究』No. 7、『南日本文化財研究』刊行会、2008年5月)

美露2006 『南宋四明史氏』（四川美術出版社、2006年6月）

宗像神社復興期成会1966 『宗像神社史 下』（精興社、1966年）

村上博優1998a 『江南雲遊求法地資料』（上下）（龍洞院、1998年3月）

村上博優1998b 『補稿 日中文化交往歴史年表』（龍洞院、1998年3月）

村上博優2004 『瀬戸焼の祖 陶祖加藤景正の考察』（グリーン美術出版、2004年6月）

吉田久昭2008 「東大寺の石獅子の石材と近畿地方の類似岩石」（中日石造物研究会主催「東大寺石獅子をめぐり研究集会」レジュメ集、2008年8月9日）

楊古城・龔国栄2006 『南宋石彫』（寧波出版社、2006年12月）

「志自岐沖之宮石鉢之圖 / 沖島全圖 平戸藩蔵」（文政五年（1822）壬午十月、松浦史料博物館所蔵）

「肥州公御墓之圖」（松浦史料博物館所蔵）

「東大寺造立供養記」（『群書類従』第24輯釈家部、1960年4月訂正第三版）

「靈鷲山石塔欵識」（清・李遇孫撰『括蒼金石志』卷7、『石刻史料新編』（新文豊出版公司、1977年）第一輯地方類所収）

「東南商報」サイト2008年11月23日「寧波石料刻出日本国宝」 <http://dnsb.cnnb.com.cn/system/2008/11/23/010050040.shtml>

「鄭州檔案」サイト「2004年第一季度大事記」 http://daj.nbyz.gov.cn/art/2008/3/25/art_609_1334.html

追記：高津、大木、橋口は、平成21年11月7・8日に第2回北部九州薩摩塔調査を行い、武雄市西光密寺、多久市妙覚寺、大村市龍福寺跡、平戸市志々伎神社中宮にて薩摩塔石材の肉眼観察による調査を行い、いずれも坊津薩摩塔と同一石材であると認定可能との結果を得た。調査結果は、本論考に反映している。なお、今回の調査にあたり、西野元勝（佐賀県教育庁社会教育文化財課）、岩永雅彦（多久市教育委員会）、大石一久（長崎県文化・スポーツ振興部文化振興課）、津田文（佐賀県教育庁社会教育文化財課）、富崎善隆（大村市立福寺町薩摩塔所蔵者）、大野安生（大村市教育委員会文化振興課）、萩原博文（平戸市教育委員会文化遺産課）、植野健治（平戸市教育委員会文化遺産課）の各関係者の方々から調査に対して多大なご協力をいただけたことに感謝したい。

今回の調査において、平戸市役所正面玄関前に展示されている平戸島志々伎宮ノ浦で発見された碇石（平戸号）が「梅園石と同じ地層と考えられる、泥岩を挟在する凝灰質砂岩」と判明したことは、志々伎宮ノ浦が寧波産石材を碇石とする中国船の寄港地であったことを明白に示す証拠となり、重要な発見であった。上田1976によれば、谷口宏充博士（現東北大学教授、火山科学）により、櫛田号（福岡市博多区・櫛田神社）、佐々古号（萩市大井・荒人神社）の2つの碇石についても、平戸号と同一ないし近似石材との鑑定が行われており、ともに寧波産石材の可能性が高いと言えよう。また、碇石の科学的分析による産地の同定は、既に鈴木和博等により行われており、長崎県鷹島海底遺跡花崗岩質碇石が中国福建泉州産（Suzuki et al.2000）、博多湾志賀島玄武岩質碇石が韓国済州島産（鈴木等2000）と判明している。今後、こうした科学的分析及び共伴遺物の分析が進展することにより、非常に限定的であり、慎重な判断を要求されるが、寧波船、泉州船など、ある程度の船籍の推定が可能になると予想される。

薩摩塔類（薩摩塔・類薩摩塔）分布表

	現存地	旧所在地・立地性格等	基調	備考・出典等
	鹿児島県			
1	坊津歴史資料センター輝津館 (南さつま市坊津町坊)	旧所在地：(伝) 一乗院跡 (坊津町坊) 旧河辺郡・寺院・要港 (坊津)	四角	(齋藤彦松1958)
2	水元神社 (南九州市川辺町清水)	旧所在地：(伝) 雲朝寺跡 (川辺町清水) 旧河辺郡・寺院跡・在地領主居館跡周辺	六角	(毎日新聞社1961)
3	虎御前の墓 (南九州市川辺町神殿)	旧河辺郡	四角	(川辺町役場1961)
4	諏訪運動公園 (南九州市川辺町平山)	旧所在地：(伝) 宝光院跡 (川辺町清水) 旧河辺郡・寺院跡	四角	(毎日新聞社1961)
5	沢家墓地 (霧島市隼人町神宮)	大隅正八幡社家墓地	六角	(黒田清光1974)
	長崎県			
6	志々伎神社沖の宮 (平戸市野子町 宮ノ浦)	平戸島・要港(宮ノ浦)・霊山	六角	(多田隈豊秋1975) 文政5(1822)年「志自伎沖之宮石録圖」
7	志々伎神社中宮 (平戸市野子町)	平戸島・霊山・山岳寺院跡 (阿弥陀寺跡)	六角	(大石一久1998)
8	志々伎神社中宮 (平戸市野子町)	平戸島・霊山・山岳寺院跡 (阿弥陀寺跡)	四角	(大石一久1998)
9	白山比賣神社 (平戸市主師町 安満岳山頂付近)	平戸島・要港 (平戸)・霊山・山岳寺院跡 (付近に楊柳山西禅寺跡)	四角	(大石一久1998)
10	白山比賣神社 (平戸市主師町 安満岳山頂付近)	平戸島・要港 (平戸)・霊山・山岳寺院跡 (付近に楊柳山西禅寺跡)	四角	今回発見
11	館山是興寺跡 (平戸市鏡川町)	平戸島・要港 (平戸)・寺院跡 在地領主居館跡周辺	四角	(大石一久1998)
12	桜溪書院跡 (平戸市戸石川町)	平戸島・要港 (平戸)	四角	久家孝史氏発見 久家孝史氏御教示
13	里田原歴史民俗資料館 (平戸市田平町里免)	旧所在地：海寺跡 (田平町山内免) 宋風獅子共伴	四角	(大石一久1998)
14	里田原歴史民俗資料館 (平戸市田平町里免)	旧所在地：海寺跡 (田平町山内免) 宋風獅子共伴	四角	(大石一久1998)
15	龍福寺跡 (大村市立福寺町)	寺院跡	六角	(大石一久1998)
	佐賀県			
16	黒髪山西光密寺 (武雄市山内町大字宮野)	霊山・山岳寺院	六角	(大石一久1998)
17	妙覚寺境内 (多久市南多久町大字下多久)	山岳寺院	四角	西野元勝氏発見 (西野元勝氏御教示)
18	妙覚寺境内 (多久市南多久町大字下多久)	山岳寺院	四角	大石一久氏発見 (西野元勝氏御教示)
	福岡県			
19	首羅山遺跡 (久山町大字久原)	霊山・山岳寺院跡・要港 (博多) 周辺 宋風獅子共伴	四角	(井形進2008)
20	首羅山遺跡 (久山町大字久原)	霊山・山岳寺院跡・要港 (博多) 周辺 宋風獅子共伴	四角	(井形進2008)
21	太宰府市内個人宅 (太宰府市)	旧所在地：(伝) 竈門山 大宰府・霊山・山岳寺院跡	四角	(井形進2008)

※薩摩塔類には一石造り型のほか寄石造り型のものがみられ、残存状況によっては個体数の把握が困難なケースも多く、本表に示した薩摩塔類の個体数は、今後増加する可能性がある。

※上記4県の記載順は、発見された時期の早い県順とした。

※1の坊津薩摩塔は、機器を用いた岩石学的分析により、寧波産石材梅園石と同一石材と認定された。2-20及び共伴の宋風獅子は、肉眼観察により、坊津薩摩塔と同一石材と認定可能。



輝津館現存の薩摩塔 (四角基調)
(鹿児島県南さつま市坊津町坊)



志々伎神社沖の宮現存の類薩摩塔(志々伎神社沖の宮塔) (六角基調)
(長崎県平戸市野子町宮ノ浦)



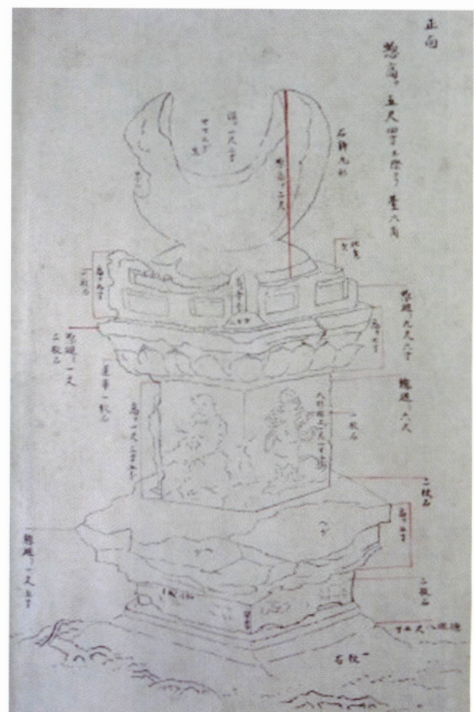
水元神社現存の薩摩塔 (六角基調)
(鹿児島県南九州市川辺町清水)



万象山公園現存の靈鷲寺石塔 (六角基調)
(浙江省麗水市)



「肥州公御墓之圖」に描かれた館山是興寺跡現存の薩摩塔残欠（画面中央）
（松浦史料博物館所蔵）



文政5（1822）年「志自伎沖之宮石鉢圖／沖島全圖」に描かれた沖の宮現存の類薩摩塔
（松浦史料博物館所蔵）